

第64回 GSブームにつながる 歌って踊れるコーラスグループ

ルルー ルルー ルー、ルー・ルック・チョココレート（♪夢は不二家のルック・チョココレート）。東京・数寄屋橋交差点にある「不二家」の前で信号待ちをしていると、今でもこのメロディーが頭の中を駆け巡ります。

昭和39年、東京五輪開催前の頃でしようか、日曜の夜7時半から始まる漫画『ポパイ』を提供していた不二家のルック・チョココレートのCMに登場し、どこかの埠頭で楽しそうに歌い踊っていたのは、あおい輝彦をはじめとする4人組のジャニーズでした。

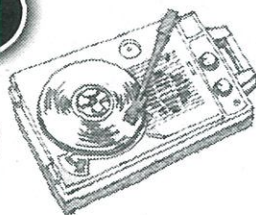
当時、歌って踊れる若者グループとして、高い人気を得ていたのが長沢純ら3人組のスリー・ファンキーズ（スリファン）で、39年2月、ビートルズの『抱きしめたい』が日本で発売されると、2か月後にはスリファンや東京ビートルズが日本語でカバー、若者たちの間に「グループを組もうぜ」という機運が高まります。ただし、それが「バンド結成」に至ることは少なく、「仲間を組ん

で歌おうぜ」といった感覚でした。昭和30年代に人気の高かった男性コーラスグループといえば、紅白歌

名曲カルテ

昭和歌謡と いまでも

堀井六郎
絵・松本浦



合戦の常連だったダークダックスですが、若者が求めたものは本格派の男性合唱ではなく、ロカビリーのような絶叫スタイルでした。当時は、ベンチャーズ来日を機に勃発するエレキブーム到来前で、エレキギターは普及しておらず、バンドを組んで芸能界にデビューするという発想が若い世代にはまだ希薄だったのでし

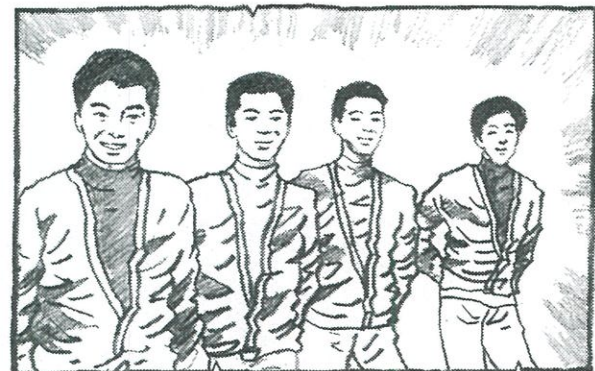
よう。39年5月、クール・キャッツという5人組が『プリーズ・プリーズ・ミー』を日本語カバーしてデビュー（すぐに4人組に）、それなりの人気を得て、ジャニーズの対抗馬と目されるようになります。

40年になると、スリファン、ジャニーズ、クール・キャッツは「歌って踊れるグループ」のビッグ3と称されるようになります。ビートルズが魅了した「歌って演奏するスタイル」は、ベンチャーズとの相乗効果で日本中の若者を『ウエスト・サイド物語』の世界から一

気にバンド結成へと向かわせます。

踊りよりもバンド演奏という流れは、ジャニーズのバックバンド「ハイスアエティー」を誕生させ、クール・キャッツを7人組のバンドに編成替えさせ、スリファンには一時楽器を持たせましたが、どれもGSという新たな時代の潮流に乗ることはできませんでした。

平成の世の紅白は、歌合戦とは名ばかりのダンス・パフォーマンス合戦に様変わりしましたが、歌って踊れるグループをたどっていくと、私の中では、この3グループに行き着きます。



スリファンもクール・キャッツも今のようなダンスには程遠いものでしたが、スパイダースのような歌って踊れるロックバンドへとバトンをつなぎ、タイガースやテンプターズのようなパフォーマンス付きのGSにも継承、ジャニーズは「お菓子とアイドル」の甘い関係をCMで教えてくれました。